

「只見 移住物語」

南郷トマト農家

【移住者のご紹介】

- ・お名前：松沢 健次 様 (74歳)
- ・ご家族：長男 ^{たけし} 健 様 43歳 (独立 南郷トマト農家)
 - 長女 41歳 (独立 沖縄県 在住)
 - 次女 39歳 (独立 山梨県 上野原 在住)
- ・いつ：2010年
- ・どこから：埼玉県 越谷市
- ・どこへ：布沢 (毘沙沢林道上る)
- ・いましていること：南郷トマト農家
- ・まえにしていたこと：コマーシャル フォトグラファー・写真DPE店舗 経営



南郷トマトビニールハウス 休憩所 (ブドウ「巨峰」棚の下) にて

【始まり】

趣味の溪流釣りで1980年頃から只見へ通っていました。魚影の濃い黒谷川にヤマメ、イワナを求め通っていました。暫くして「田舎暮らしの本(田舎の不動産物件を紹介する雑誌)」に載っていたたもかく(現「みんなの森協同組合」)の記事を見て、いま住んでいる土地を紹介してもらいました。土地を見に行っただけで、ミズナラの森の中にあるのがとても気に入り、すぐに購入しました。その後、コツコツと手作りで家を建てました。

【準備】【家族】

移住を考えるきっかけは、フィルムカメラからデジタルカメラへの移行が進み、写真 DPE 店舗をたたんだことにあります。でも、その後の移住もトマト農家になることも順調に進んだ訳ではありません。

一昔前 トマト農家になるための補助金とか支援は、今のように整ってはいませんでした。当時の補助金の給付条件は「45歳までの夫婦に限る」と言った感じで、それは厳しいものでした。そのような状況下 当時から親しくして頂き、いまでもお世話になっている地元の篤志家 M 氏から、その方の所有するビニールハウスを使ってトマトを作り始めてはどうかと力添えを頂き、翌年からスタートするまでに辿り着きました。確か、まだ私が住所を移す前だったと思います。

トマト農家への道筋が見えてきたところ、妻に癌が見つかりました。M 氏へ事情を説明し、妻の治療に専念するために越谷へ戻ることにしました。

2011年 妻が亡くなりました。私は一人で只見に戻りビニールハウスを借り、自己流のトマト作りを始めました。ここでも M 氏のアドバイスがあつて南郷トマト組合員になることを決意しました。いまでも一定の研修期間を経てトマトの育成技術を身に付け、その後も指導を受けながらトマト農家として独立する、これが正式ルートなのでしょうが、南郷トマト組合の幹部の方にお会いし『私は高齢で、余っている時間も少ないので「研修」は省いていただけませんか?』とお願いしました。結果として「2年間の指導」を受けながらトマト栽培をスタートさせ、南郷トマト組合員になることが出来ました。それが10年前、私が65歳の時のことです。

いま私の圃場の隣には、長男 健が管理するビニールハウス棟があります。健も南郷トマト組合員で、独立して生計を立てています。写真 DPE 店舗を経営しているときは、彼に仕事を手伝ってもらっていましたが、店舗を閉めてからは、アルバイトで生計を立てていたと思います。

私がトマト農家として先行きが見え始めてから、彼には「只見に来てトマト栽培をしないか」と声を掛けていました。2015年 彼は只見に来て、トマト作りを始めました。

私は、人との出会いに恵まれ、多くの支援を受けてトマト農家になることができました。長男は、周りの方々の支援だけでなく、制度的にも大きな恩恵を受けトマト農家になることが出来たと思います。

植物が好きで、田舎の環境が好きな若者にとっては、本当に魅力のある地域、制度だと思います。



トマトビニールハウス 全景

【現在】【将来】

いまトマト栽培が楽しくて仕方がありません。植物に興味のない人には、つらい作業かもしれませんが、自分にとってはこれほど楽しいことはありません。あんなに溪流釣りが好きだったのに、今ではトマト一筋です。

トマト栽培のない冬季にはガーデニングを楽しんでいます。私 実は、二地域居住者なのです。もう 3~4 年になりますか、山梨県 上野原に娘がいるのですが、そこに中古の別荘物件を購入しました。かつて秋山村（旧南都留郡 秋山村、上野原市に合併）と言われていたところですが、私のいるところは山の中で標高 600m 程、寒いところです。雪も何回か降りますが、ここと比べれば一日で融けます。

大好きなターシャ デューダ（米国の女性 挿絵画家、絵本画家、園芸家）の世界を作ろうと、男版ターシャデューダに成ってガーデニングに励んでいます。

【変化】

こちらに来る前、趣味で世田谷 上町にあるイタリア レストランを利用した料理教室に通ったことがあります。そこでサンマルツアアーノという加熱用トマトに出会いました。

当時 サンマルツアアーノは、生では手に入り難いトマトで、国内流通はほぼ缶詰品でした。これを生で食べてみたい、料理に使ってみたいと思いました。試しに只見で作ってみると良いものが出来たのです。トマトソースを作り、パスタに絡ませ、食べるととても美味しかった。

少しずつ生産量を増やし、固定客もでき、将来を楽しみにするまでになりましたが、5年前 長男が南郷トマトを作り始めたのをきっかけにすべてを止めました。

理由は二つ。サンマルツアアーノを作るとなると、やはり南郷トマト作りが、どこかおろそかになること。そして、健が南郷トマト農家になったことです。

【アドバイス】

田舎の緩さというか、緩やかなところが田舎の良さという思いに至らず、最初に来た時は色々なところとぶつかり、怒りまくっていました。いまは慣れたというか、こういうものかと理解できるようになりました。むしろ慣れると、こちらの方が楽だと思えます。暮らして行く、生きて行くには、本当は、このやり方が良いという気がします。

ただ慣れるまで、理解できるまでは、やはり、そこそこの衝突や対立があり、それらを自ら消化することで到達できる精神的領域なかもしれません。これから移住する方へアドバイスというか、私の実感をお話しするなら、私は住所（生活の本拠点）を動かさずに通っていた時期が長かったのですが、住所を移さないと本当の姿は見えないと思います。

つまり地域のメンバーにならないと本当の姿は見えません。いくら通っても本当の姿は見えないように思えるのです。住所を移して、地域の一員になって、集落の人と付き合いが始まって、本当の姿が見えてくるように思えます。

兼ね合い、塩梅が本当に難しいのですが、そうやって（住所を移し、地域の一員になり、集落の人と付き合いが始まる）から、自分の考えを主張するところと、抑えるところを意識して暮らして行くことが、良いのではないかと思います。

【生活】

ご近所とのお付き合いで心がけることは、地域メンバーに入って色々とお見えてくるまで、付かず離れずの程よい距離が取れると良いですね。

【不便】

暮らし始めて本当に困ったと言うことはありません。いま困っていることもありません。

【不安】

自然は最高に良いところだと思いますが、人が減ってきていますね。人がいなければ不便になり、暮らしづらくなります。これから只見はどうなってゆくのだろうと思ったりすることがあります。

しかし、私が只見を選んだ理由は「何もないところだから」です。「何もないことをアピールしよう」と言えば、地元の方に怒られてしまいかねない話ですが「すべてある世界からやってきた人にとっては、何もないところが心穏やかになる」のではないのでしょうか。観光地がないのもとても良いですね。デメリットと思われているものが、実はメリットに変わる、そんな時代がすぐ近くに来ている気がします。

農地をどのように守ってゆくのか、根本的に農地をどう守ってゆくのか考えて行く事が必要ではないかと思っています。農地をないがしろにしている国なんて、世界中を探してもないでしょう。農地をどう守るか、色々提案もあるでしょうが、それらはすべて昔ながらの考え方に依存した手法なのです。根本的に農地を守る、維持する、活用する方法を考え、変える時期に来ているのではないかと思っています。農地は絶対に守らなければいけないと思います。

【印象】

やはり植物が好きなので、やはりトマト栽培が出来るのは移住した喜びですね。また自然とのふれあい、只見の自然は何物にも代えがたいと思います。越谷も上野原も、ここも植物の植生がかなり違うところがあります。その違いを発見したりするのがとても楽しいです。

2020年7月21日 圃場 休憩所にてインタビュー
インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博